

遠景近景

十一月の祝日の朝、目を覚ました四歳の娘を抱っこすると、体が熱いのに気づきました。熱を測ると三十九度。あわてて休日応急診療センターに駆け込みました。新型インフルエンザが猛威をふるっている時期、待合室は患者であふれていましたが、診察を終え薬をもらうまで一時間程と予想以上にスムーズでした。

こうした地域医療を支える

医師の不足が全国的に問題になっていきます。その一因が二〇〇四年に始まった新臨床研修制度にあると言われます。

以前は卒業した大学の附属病院での研修が慣例化していましたが、新制度では研修先を全国の病院から選べるようになりまし

た。結果、新人医師

の都会志向を受け、地方の大学病院は貴重な労働力である研修医を確保できず、人手不足を補うため、関連病院に向していた医師を呼び戻す。その関連病院が人手不足となり、地域医療に影響が出る…。負の連鎖を呼んでいます。そんな中、和歌山県立医科

未来の地域医療を守る

大学附属病院が地方の大学病

院ながら新人医師の人気を集

め、注目されています。同病

院が受け入れた研修医は、新

制度導入初年度の〇四年が三

十二人で、以降はほぼ毎年増え、

今年は五十六人でした。来年

四月からの希望者は六十一人と過去最高。うち三十六人は

和医大以外の学生です。

人気の秘密は自由に選べる

研修プログラムにあります。

他病院は内科や外科から回る

ことが多いようですが、和医

大は好きな科から選べます。

研修医の自主性を尊重するこ

とで意欲的に取り組んでもら

える訳です。また、先進的な

医療設備を備え、高度な医療

技術を学べる一方、市民病院

としての側面を持つため、患

者とコミュニケーションを取

りながら軽度の病気やけがに

対応する経験も積めます。和

医大卒業後臨床研修センターの

上野雅巳センター長は「幅広い疾患をみられ、かつ高い専

門性を備えた医師を育てるのが理想。この二つがあれば高度医療、救急医療、地域医療が安定する」と話します。

研修医の多くは研修期間の

二年間のうち、三カ月から半年程度、大学を出て公立那賀

病院や橋本市市民病院など地域の病院で過ごします。「二年

目の研修医は十分戦力になる

し、現場での経験は本人の能力アップにつながる」と上野

センター長。二年の研修後も

多くは和医大に残っています。

新人医師たちが第一歩を

踏み出す場に和医大を選択し

てくれていることは、未来の

地域医療にとって明るい材料

です。県民の安心を守る和医

大の取り組みは、今のところ

順調と言えます。 (西山)